姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第57集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第360次発掘調査報告書―

2018

姫路市教育委員会

序

姫路城は、本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代初頭、池田輝政によって五重六階、地下一階の連立式天守が築かれて以来、400 年を経た今でも威容を誇っています。

姫路城の城下町は、姫山・鷺山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめとする城の中枢が置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地や寺社を中心とした外曲輪に区分されています。現在、内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として登録・指定され保護・顕彰が図られるとともに、外曲輪では中核市に相応しいまちづくりがなされています。

今回、外曲輪の西二階町において町屋の発掘調査を実施し、数多くの遺構を確認することができました。

ここにその調査成果を報告し、姫路城跡の調査・研究の発展に資する所存であります。

最後に、事業の実施にあたり、多大なご協力を賜りました和田興産株式会社、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成 30 年 (2018 年)3 月 31 日

姫路市教育委員会

教育長　中杉　隆夫

例　言

1. 本書は、姫路市が和田興産株式会社の委託を受け、姫路市西二階町93番他において実施した姫路城城下町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の実施ならびに本報告書の刊行に際しては、和田興産株式会社に多大なるご協力を頂いた。また、現地作業は安西工業株式会社が実施した。
3. 現地調査及び整理作業、報告書の編集は、姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　例

1. 姫路城跡は、文化財保護法により「特別史跡姫路城跡」と周知の埋蔵文化財包蔵地である「姫路城城下町跡」に区分されている。調査次数については、これを区別せず「姫路城跡第〇次」としている。
2. 発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果2000）に準拠する平面図直角座標系第Ⅴ系を基準とし、数値はｍ単位で表示している。
3. 本書で用いる標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
4. 遺構の略称は、文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』記載の略号を使用し、以下のように呼称している。

   SK：土坑、SE：井戸、SP：柱穴・小穴、SD：溝
5. 遺構・土層等の呼称は、調査時の番号を基本とするが、整理に際して変更したものもある。
6. 土色と土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編2003『新版　標準土色帳　25版』日本色研事業株式会社に準拠した。
7. 遺物の計測値と観察所見は観察表を作成し、まとめている。法量は、残存率が1/4未満の部位に関しては、（　）を付けて復元した数値を示している。
8. 遺物番号は基本的に通し番号とする。
9. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図ともに一致する。
10. 本書で用いる分類名・土器編年及び年代観は次の文献によっている。

肥前陶器・磁器：九州近世陶磁学会事務局2000、備前焼：乗岡2002、丹波焼：兵庫県教育委員会1992、
堺擂鉢：白神1992、焙烙：中川2012、焼塩壺：江戸遺跡研究会2001

目　次

第１章　調査の経過 …… 1
第１節　調査に至る経緯と体制 …… 1
第２節　調査の経過 …… 2
第３節　遺跡の位置と環境 …… 2
第２章　調査の成果 …… 4
第１節　基本層序 …… 4
第２節　江戸時代の遺構・遺物 …… 4
第３節　江戸時代以前の遺構・遺物 …… 7
第３章　総括 …… 8

表目次

表１　遺物観察表

図目次

図１　調査地周辺の地割復元図
図２　調査位置図
図３　調査区断面図
図４　第１面 遺構平面図
図５　第２面 遺構平面図
図６　第１面 遺構断面図
図７　井戸 平・断面図①
図８　井戸 平・断面図②
図９　第２面 遺構断面図
図10 遺物実測図①
図11 遺物実測図②
図12 遺物実測図③
図13 遺物実測図④

写真図版目次

写真図版１　1　調査区全景（西より）
写真図版２　2　第１面全景（南より）
写真図版３　3　第２面全景（南より）
写真図版４　4　SK1 土層断面（A-A’）
5　SK3 土層断面（B-B’）
6　SK4・8 土層断面（C-C’）
7　SK6 土層断面（D-D’）
8　SK7 土層断面（E-E’）
9　SK22・23 土層断面（G-G’）
10　SK30 土層断面（I-I’）
11　SK37 土層断面（J-J’）
写真図版５　12　SK46 土層断面（K-K’）
13　SE8 平面状況
14　SE9 平面状況
15　SK52 土層断面（L-L’）
16　SK52 平面状況
17　SK61 土層断面（M-M’）
18　SK63 土層断面（N-N’）
19　SD1 土層断面（O-O’）
写真図版６　20　SK1 出土遺物
21　SK22・23 出土遺物
22　SK24 出土遺物
写真図版７　23　SK8 出土　施釉陶器（鉢）
24　SE1 出土　焙烙
25　SE2 出土　焼塩壷
26　SK22・23 出土　火打ち石
27　SK24 出土 硯
28　SK52 出土 石

第1章　調査の経過

第1節　調査に至る経緯と体制

姫路市西二階町93番他において集合住宅の建設工事が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号：020169）に位置している。事業者より文化財保護法第93条に基づく届出が提出されたことから協議を行い、遺跡の性格や内容を把握するために確認調査を実施することとなった。平成28年（2016年）6月28日･29日に敷地内において4ヶ所の試掘坪を設定し、確認調査を実施した。その結果、北西部と南西部に設定した調査区では近世の遺構を確認した。中央部に設定した調査区では、西端から約1.0mにコンクリート構造物が存在し、その西側では基盤層となる黄褐色シルト層を検出したが、東側は現地表から1.3mまで攪乱が及び遺構は確認できなかった。北東部の調査区についても、現地表から1.2mまで攪乱が及び、遺構は確認できなかった。

確認調査の結果、建物建設範囲の西側では遺構が良好に残存していたが、東側については既設建物の基礎による撹乱を受けていることが判明した。このことから、兵庫県教育委員会からの発掘調査の通知に基づき、工事の掘削により遺跡が影響を受ける建物建設部の西側部分を調査対象として和田興産株式会社と姫路市で委託契約を締結し、本発掘調査を実施することとなった。

確認調査開始から整理作業終了までの体制は、以下のとおりである。

平成28年4月1日～平成29年3月31日

姫路市教育委員会
　教 育 長　　中杉隆夫
　教育次長　　八木　優
生涯学習部
　部　　長　　植原正則
文化財課
　課　　長　　花幡和宏
　課長補佐　　大谷輝彦（調整）
　技術主任　　南　憲和（調整）
埋蔵文化財センター
　館　　長　　前田光則
　課長補佐　　岡﨑政俊
　係　　長　　森　恒裕
　技術主任　　小柴治子
　　中川　猛
　　福井　優
　　関　　梓（調査・整理担当）
　主　　事　　小林啓佑
　技　　師　　黒田祐介
　嘱託職員　　黒岩紀子、香山玲子、清水聖子、
　　田中章子、玉越綾子、野村知子、
　　松田聡子、三輪悠代
　臨時職員　　秋枝　芳、荒木聖奈子、宅見春美、
　　寺本祐子、藤村由紀

平成29年4月1日～平成30年3月31日

姫路市教育委員会
　教 育 長　　中杉隆夫
　教育次長　　名村哲哉
生涯学習部
　部　　長　　岡田俊勝
文化財課
　課　　長　　花幡和宏
　課長補佐　　大谷輝彦（調整）
　技　　師　　黒田祐介（調整）
埋蔵文化財センター
　館　　長　　前田光則
　課長補佐　　岡﨑政俊
　係　　長　　森　恒裕
　技術主任　　小柴治子
　　中川　猛
　　福井　優
　　南　憲和
　　関　　梓（調査・整理担当）

技 師 補　山下大輝
主　　事　岡本武平
嘱託職員　韋　美紗、黒岩紀子、清水聖子、田中章子、玉越綾子、野村知子、松田聡子、三輪悠代
臨時職員　鈴木千枝美、宅見春美、寺本祐子、長谷川鈴代、藤村由紀

第2節　調査の経過

本発掘調査は、和田興産株式会社と姫路市による委託契約に基づき、姫路市埋蔵文化財センターが実施した。調査対象は集合住宅建築工事により地下の遺構に影響が及ぶ範囲とし、調査面積は201㎡である。平成28年（2016年）8月9日から発掘調査を開始し、盛土については主に重機により除去した。重機掘削と並行して遺構検出作業を行い、検出した遺構は人力により発掘した。同年9月3日に現地説明会を実施し、約20名の参加を得た。9月7日に第1面（江戸時代の遺構面）の全景写真撮影を行い、その後、江戸時代以前の遺構の調査を順次進めた。9月24日に第2面(江戸時代以前の遺構)の全景写真撮影を行い、平成28年(2016年)9月28日に現地調査を完了した。現地調査完了後、姫路市埋蔵文化財センターにおいて整理作業を行い、平成30年（2018年）3月31日、本書の刊行をもって事業を終了した。

第3節　遺跡の位置と環境

1. 地理的環境・歴史的環境

姫路城は、市川と夢前川によって形成された姫路平野のほぼ中央に位置する。姫路平野は古代から交通の要衝であり、長く東西交通の要であった山陽道に加え、江戸時代には東へ有馬街道や丹波道が、西へは美作街道が延びていた。このような地理的要因を背景として、近世城郭としての姫路城及びその城下町は17世紀初頭に形成された。

姫路城城下町は、内堀、中堀、外堀の3本の堀で分けられた内曲輪、中曲輪、外曲輪で構成されている。内曲輪は城の中枢部であり、中曲輪には家老など主に中・上級武士の邸宅が置かれた。外曲輪には、東部を南北に走る但馬道と、南部を東西に走る山陽道（西国街道）を中心に町人地が広がり、その外側に寺地や組屋敷等を配置することにより防御面にも配慮した構造となっている。

調査地は姫路城大天守から直線距離で約850m、現在は「西二階町」に位置している（図2)。しかし、第1次榊原時代の城下町絵図「姫路御城廻侍屋鋪新絵図」(慶安二年～寛文七年・1649年～ 1667年）では、調査地東側に位置する街路の両側の区画には「竪町」と記載されており、調査地が江戸時代は竪町に属していたことが分かる。

姫路城城下町では山陽道に沿ってヨコ（東西）町型の町区が多いなかで、広峰山への山アテの手法を用いて設定された竪町は、山陽道からの各ヨコ町に割って入る形をとってタテ（南北）方向に延びている（三浦1991)。

竪町については、寛延十一年（1634年）の地子銀帳の写（大久保敏郎文書）が残されており、これによると町全体で五十筆の家屋敷があり、総地表口は292間余りと記載されている。竪町が街路の両側に広がる町（両側町）であるため、本来の町の延長はその半分のおよそ146間（約264m）である。姫路城城下町の地子銀は町によって格差があり、屋敷所持者の職種のみならず、各町の地域的諸条件によってランク付け

がなされており、竪町の地子銀は本町、元塩町、綿町と並んで高額である。また、竪町北側には比較的広い家屋敷地が多く、調査地の東側の街路を挟んだ向かいには、姫路城下における本陣（大名の宿泊施設）の一つである三木家が位置している。三木家は、西二階町の那波家、本町の国府寺家とともに姫路惣町の大年寄を務める有力町人であり、今回の調査地周辺が有力町人の家屋敷地が立ち並ぶ、姫路城城下町における一等地であったことが覗える（三浦1991）。

竪町では、前述した寛永十一年（1634年）の地子銀帳の他に万治三年（1660年）に作成された地子銀帳の写（大久保敏郎文書）が残されている。地子銀帳に記された土地の表（間口）と裏（奥行き）の寸法及び、土地の所有者の名前をもとに調査地周辺の屋敷地割を復元すると、土地の所有者に差異があるものの地割は変わっていないことが判明した（図1）。

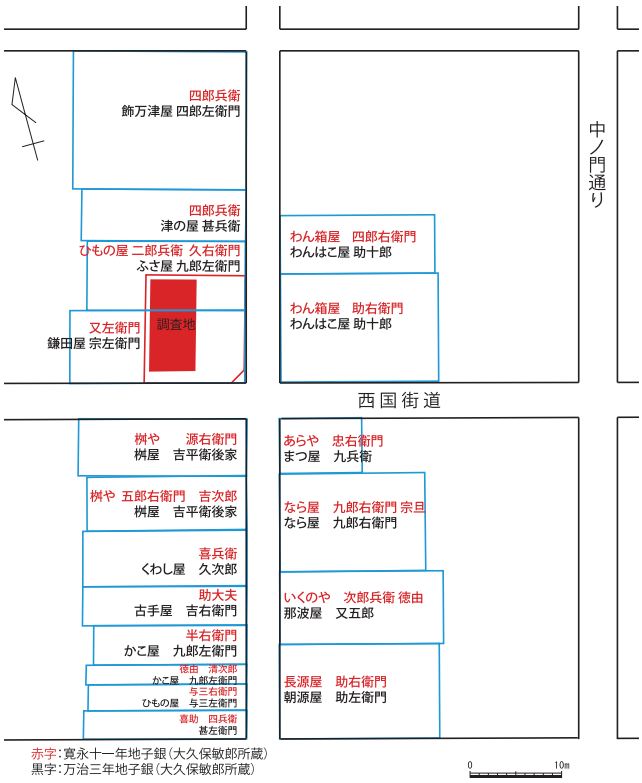


図1　調査地周辺の地割復元図（S=1：1000）

また、復元図から今回の調査地が2筆の町屋の敷地にまたがることが確認できた。土地の所有者は、寛永十一年の地子銀帳では南側は「又左衛門」、北側の土地は「ひもの屋　二郎兵衛　久右衛門」と記され、万治三年のものでは、南側は「鎌田屋　宗左衛門」、北側は「ふさ屋　九郎左衛門」と記されている。

2. 既往の調査

姫路城跡での発掘調査において、今回の調査は第360次にあたる。

調査地が位置する西二階町では、平成27年（2015年）に駐車場建設に伴う発掘調査（姫路城跡322次）が行なわれており、17世紀後半から近代にかけての遺構が確認されている。また、遊離した状態ではあるが布目瓦や須恵器など古代から中世にかけての遺物も出土している。

この他、姫路城跡では近年外曲輪での発掘調査事例が増加し、町屋や武家屋敷地の様相が徐々に明らかになってきた。

平成22年（2010年）に元塩町で行われた発掘調査（姫路城跡第261次）では、町屋1軒分のほぼ全面を調査し、出土した遺構の配置から西国街道に面した部分（表）に建物（ミセ）が位置し、その奥に水廻り、さらに奥に庭・もしくは空閑地であったという当時の町屋の空間構成が明らかとなった。また、この空間構成は現存する町屋とも一致するものであり、現在、姫路城城下町跡における町屋の基本構造として認識されている。

平成24年（2012年）に白銀町での行われた発掘調査（姫路城跡第289次）においても町屋遺構が良好に残っており、検出した屋敷境が江戸時代を通じて同じ位置で踏襲されていることが明らかになった。さらに時期を追うごとに、屋敷境の構造が柵・塀から素掘りの溝へ、さらにその後石組溝へと変化することが判明した。

その後の発掘調査でも、屋敷境の確認例は増加しており、北条口二丁目での平成27年（2015年）の発掘

調査（姫路城跡第327次）では町屋と武家屋敷地の屋敷境となる溝を検出し、平成28年（2016年）の発掘調査（姫路城跡351次）でも武家屋敷地の屋敷境が確認されている。また、同じく北条口二丁目で行なわれた発掘調査（姫路城跡354次）では、外曲輪の街路遺構をはじめて面的に調査するとともに、絵図に記された屋敷境を確認している。

これらの調査成果の蓄積により、姫路城外曲輪における町屋の構造や街路、地割の様相が徐々に明らかになりつつある。

第2章　調査の成果

第1節　基本層序

基本層序は、Ⅰ層　盛土、Ⅱ層　2.5Y5/2暗灰黄色細砂、Ⅲ層　2.5Y4/2暗灰黄色細砂、Ⅳ層　5Y5/2灰オリーブ色細砂混じりシルト、Ⅴ層　2.5Y6/6明黄褐色極細砂混じりシルト、Ⅵ層　2.5Y5/4黄褐色細砂から極細砂、Ⅶ層　2.5Y4/2暗灰黄色極細砂混じりシルト、Ⅷ層　2.5Y6/4にぶい黄色極細砂混じりシルト、Ⅸ層　2.5Y5/2暗灰黄色シルト、Ⅹ層　10YR4/2灰黄褐色細砂混じりシルトである（図3）。

今回の調査では主にⅥ層上面で江戸時代の遺構を検出し（第1面）、Ⅸ層上面で江戸時代以前の遺構を確認した（第2面）。標高は、それぞれ約11.4m、約11.3mを測る。

第2節　江戸時代の遺構・遺物

江戸時代の遺構は、土坑45基・井戸10基・ピット59基を確認した。以下、主だった遺構について記述する。

土坑（図4・6）

SK1　調査区の北西に位置する土坑である。南北2.35m、東西1.7m、深さ約0.9mを測り、平面形は長方形を呈する。出土遺物は多く、肥前系陶磁器・焙烙・備前焼甕・焼塩壺蓋（図10-1）・軒平瓦（2）などが出土した。1は内面には布目が残り、型を用いて作られたものである。器形や口縁部の形状から「泉州麻生」の刻印をもつ焼塩壺（Ⅱ類）に伴う蓋であり、完形で出土した。2は瓦当面に水波紋が施される。肥前系陶磁器はⅣ期のものが多いが、Ⅴ期まで下る遺物も含まれている。また、焙烙もH類に該当するものである。これら遺物の時期からSK1が廃絶したのは19世紀に入ってからであると考えられる。

SK2　調査区北東端に位置し、土坑の北半部は調査区外に及ぶ。検出部は南北0.4m、東西1.3m、深さ0.6mを測る。出土遺物は、肥前系陶磁器・備前焼擂鉢（図10-3）・丹波焼擂鉢（4）・平瓦（5）などである。3は近世3期に該当する。4はⅦ期に位置づけられる。5は内面に粗い斜め方向の糸切りの痕跡（コビキA）が残る。丸瓦は中世に遡るものであるが、出土した遺物は概ね18世紀前半の遺構と考えられる。

SK3　調査区北西に位置する土坑である。SK11・SK17を切る遺構であり、南北2.0m、東西1.5m、深さ0.6mを測る。出土遺物は、焙烙（図10-6）・肥前系磁器（7～10）・施釉陶器（11・12）である。6は器高がやや低く、口縁部に丸みを持つ焙烙でありE3類に相当する。7は紅皿、8は蓋、9は碗、10は皿であり、いずれもⅤ期に位置づけられる。11は京・信楽系の碗である。12は鉢であり、胎土から信楽焼と考えられる。遺物の時期からは、土坑の廃絶時期は19世紀以降と考えられる。

SK4　調査区北端に位置する土坑である。SK8を切るもので南北1.0m、東西1.5m、深さ0.2mを測る。出土遺物には肥前系陶磁器（Ⅴ期）・焙烙（H類）・瓦などがある。遺物の時期から19世紀以降の廃絶と考えられる。

SK6　調査区北部に位置する南北に細長い土坑である。南北1.0m、東西0.35m、深さ0.25mを測る。出土遺

物は焙烙（図10-13）・備前焼擂鉢（14）である。13は内湾する口縁をもち、外面体部に格子タタキが入るタイプでありＡⅠ類に該当する。14は直線的に立ち上がる口縁を持ち、放射状スリメが入ることから中世5期から6期に位置づけられる。

SK7　調査区北東に位置する楕円形を呈する土坑である。南北1.9m、東西0.9m、深さ0.45mを測る。遺構の東側は撹乱により削平されている。出土遺物は肥前系磁器壺（図11-15）・施釉陶器壺（16）・施釉陶器徳利（17）・焙烙（18）などである。16は外面に鉄釉が施される。17は削り出し高台を持ち、外面に灰釉を施す。18はH類に該当する。遺物の時期から19世紀以降に埋まったものと考えられる。

SK8　調査区北端に位置する土坑である。SK4に切られており、南北0.6m、東西2.5m、深さ0.75mを測る。土坑の北半部は調査区外に及ぶ。出土遺物は肥前系陶器皿（図11-19）・施釉陶器鉢（20）・丸瓦（21）がある。19は見込みに目跡(砂目)が残る。Ⅲ期に位置づけられる。20は片口鉢で、内面全体に灰釉が施される。SK3から出土した鉢(図10-12)と胎土・器形ともに類似している。21の内面には斜めの方向の糸切り痕跡(コビキA）と吊具の痕が残り、中世にの範疇に位置づけられるものである。

SK16　調査区北西、SK1の北東に位置する土坑である。南北約0.9m、東西約0.7m、深さ0.3mを測る。埋土は、黄灰色細砂混じりシルトに黄褐色シルト(地山)をブロック状に含む。出土遺物には備前焼擂鉢(近世2期)や土師器などがある。

SK22・23　調査区中央東側に位置する土坑である。SK22を切って掘られた土坑がSK23である。SK23は南北2.3m、東西1.9m、深さ0.4mを測る。SK22は南北2.0m、東西約1.2m、深さ0.6mを測る。SK22から肥前系陶磁器(Ⅳ期)・関西系焼締陶器擂鉢（Ⅲ型式)・火打ち石が出土している。

SK24　調査区中央東側に位置する土坑である。南北約2.0m、東西1.5m、深さ1.5mを測る。出土遺物は、肥前系陶磁器（Ⅴ期)・擂鉢・焙烙（H類)・軒平瓦・軒丸瓦・硯（図11-22）である。22の硯には、陸部と裏面に線刻で文字や花押・絵などが描かれている。

SK30　調査区中央西側に位置し、SK39・SE7　を切る土坑である。南北1.3m、東西1.7m、深さ0.6mを測る。出土遺物は焙烙（図11-23)・白磁（24)・肥前系陶器（25・26)・擂鉢（27)・軒丸瓦（28）が出土した。23はE3類に該当する。25は刷毛目碗である。Ⅲ期に位置づけられる。27は関西系焼締陶器であり、Ⅰ型式に該当する。28は揚羽蝶文をもつ池田家の家紋瓦である。

SK37　調査区南西に位置する土坑である。南北1.9m、東西1.1m、深さ0.35mを測る。埋土はオリーブ褐色を呈し、炭化物や小礫を多く含む。出土遺物には肥前系陶器・備前焼擂鉢（近世1期)・瓦などがある。

SK46　調査区中央に位置する土坑であり、SE6・SE7によって切られている。南北1.7m、東西1.2m、深さ0.2mを測る。出土遺物は、青花（図12-29・30)・擂鉢（31)・焙烙（32～34）である。29は皿、30は碗もしくは皿の底部である。漳州窯系の染付と考えられ、17世紀初頭に位置づけられる。31は備前焼擂鉢で斜めのスリメが入ることから近世1期に該当する。32～34は体部外面に格子タタキを持つタイプの焙烙であり、A1類に該当する。

SK51　調査区南西端に位置し、SE9を切る遺構である。南北2.0m、東西1.7m、深さ0.5mである。埋土は黄褐色を呈する。出土遺物には焙烙（図12-35)・土師器・須恵器である。35は体部外面に格子タタキを持つタイプであり、A1類に該当する。

井戸（図4・7・8)

SE1　調査区北端に位置し、井戸の北半分は調査区外に及んでいる。川原石を用いた石組み井戸であり、石

組みの内径は1.0mを測る。断割りを行い、現地表から3.2m（標高約9.3m）で井戸底を確認した。出土遺物は備前焼壺（図12-36）、瓦質火鉢（37）・焙烙（38）・丸瓦（39）・肥前系陶磁器である。37は軟質瓦質の火鉢で、内外面ともに丁寧なミガキを施す。38は体部に格子タタキをもつタイプの焙烙でありA1類に該当する。39の内面には、斜めの方向の糸切りの痕跡（コビキA）と吊具の痕が残る。瓦については中世末に該当するものであるが、他の出土遺物の時期は概ね17世紀後半に位置づけられる。

SE2　調査区中央西端に位置する。井戸の西側が一部調査区外に及んでいる。扁平な角石を用いた石組み井戸であり、石組みの内径は0.7～0.8mを測る。断割りを行い、現地表から4.1m（標高約8.5m）で井戸底を確認した。出土遺物は、土師器皿（図12-40）・焼塩壺（41・42）・瓦・肥前系陶器である。41・42は体部側面に「泉州麻生」の刻印が施されている（写真図版7-26）。内面には布目が残り、粘土板を芯に巻きつけて成形していることから、Ⅱ類に該当する。遺物の時期は概ね17世紀後半から18世紀初頭に位置付けられる。

SE3　調査区中央東端に位置する。川原石を用いた石組み井戸であり、石組みの内径は0.8mを測る。井戸の内側はコンクリートで固められており、近年まで使用されていたと考えられる。遺物は出土していない。

SE4　調査区南東に位置する。掘方の直径2.2m、深さ約2.5mを測る。井戸の直径が他の井戸に比べて大きく、川原石などの石材が全く確認できなかったことから、井戸廃棄時に使用していた石材を抜き取った可能性も考えられる。出土遺物は土師器や陶磁器があるがいずれも細片であり時期の特定には至らなかった。

SE5　調査区中央西側に位置する。川原石を用いた石組み井戸であり、石組みの内径は0.9mである。井戸の中央に鉄管が残置されており、ポンプを用いて近年まで使用されていたと考えられる。断割りを行い、現地表から4.3m、標高約7.4mで井戸底を確認した。埋土からは焙烙（図12-43）や肥前系陶磁器・土師器片などが出土している。43はH類に該当することから、この井戸が19世紀代には掘削されていたと考えられる。

SE6　調査区中央に位置する。掘方の直径は1.6m、深さ2.5mを測る。石組みなどは確認できなかったが、井戸廃棄時に石材を抜き取った可能性も考えられる。出土遺物には陶磁器・瓦・ガラス片などあり、井戸が埋められたのは近代以降と考えられる。

SE7　調査区中央に位置する。扁平な角石を用いた石組み井戸である。遺構の北側がSK30に切られている。石組みの内径は南北0.7m、東西0.9mである。出土遺物は施釉陶器（図13-44・45）・肥前系磁器（46）・擂鉢（47・48）が出土した。46は、蛸唐草文様を施した鉢である。Ⅴ期に該当する。47・48は備前焼擂鉢で、47は近世1期、48は中世Ⅴ期に位置づけられる。

SE8　調査区南部に位置する。SK40によって切られており、SK40完掘後に井戸の下層部分を確認した。扁平な角石を用いた石組み井戸であり、石組みの内径は0.7mを測る。青磁・須恵器などが出土した。出土遺物はいずれも細片であり時期の特定には至らなかった。

SE9　調査区南西に位置する。石組みの内径は0.6m、深さ2.1m以上を測る。井戸枠の上層は川原石を用いた石組みであり、下層は曲物を用いる。出土遺物は瀬戸美濃焼折縁小皿（図13-49）・瓦質土器（50）・土師器・須恵器などがある。49は口縁部のみであるため、詳細な時期の特定はできないが大窯後半に該当すると思われる。

SE10　調査区南部に位置する。2.0m、石組みの内径は0.8m、深さ1.6m以上を測る。川原石を用いた石組み井戸である。上層の石組みは残っておらず、下層の石組のみが残置されていた。出土遺物に瓦質火鉢などがあるが、多くは細片であり詳細な時期の特定には至らなかった。

第3節　江戸時代以前の遺構・遺物

江戸時代以前の遺構として土坑9基、柱穴8基、溝1条を確認した。以下、主だったものについて記載する。

土坑（図5・9）

SK15　調査区北部に位置する。南北0.7m、東西0.9m、深さ0.05mを測る。埋土は灰黄色を呈する。出土遺物は土師器・須恵器であるが、細片であり図化できなかった。

SK26　調査区中央に位置する。南北0.7m、東西0.4m、深さ0.3mを測る。埋土は灰黄色を呈する。出土遺物は土師器・須恵器であるが、細片であり図化することができなかった。

SK29　調査区中央東側に位置する。楕円形を呈する土坑で、SK24により北側の一部が切られている。南北0.3m、東西1.0m、深さ0.1mを測る。埋土は灰黄色を呈する。出土遺物は瓦質火鉢・須恵器・土師器であるが、細片であり詳細な時期の特定には至らなかった。

SK41　調査区南部に位置する楕円形の土坑である。SK42を切る遺構であり、南北0.3m、東西0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は暗灰黄色を呈し、土師器・須恵器が出土したが、細片であったため図化できなかった。

SK42　調査区南部に位置する土坑である。SK41によって一部切られている。埋土は灰黄色を呈し、南北1.3m、東西0.7m、深さ0.2mを測る。瓦や土師器が出土したが、細片であり図化できなかった。

SK43　調査区南端に位置する土坑である。土坑の南半部は調査区外に及んでおり遺構の全容は把握できなかった。南北0.8m、東西0.5m、深さ0.4mを測る。埋土は灰黄色を呈し、須恵器椀（図13-51）・青磁・土師器が出土している。

SK52　調査区南西に位置し、SE9により遺構の一部が切られている。直径0.7m、深さ0.3mを測る。円形の土坑で、底に川原石が敷き詰められており、柱の根石であった可能性が考えられる。土坑の西端に位置する石には、中央に直径2cmほどの円形の窪みがあり、何らかのものが当たっていた痕跡が残る（写真29）。出土遺物は土師器・須恵器・備前焼擂鉢などであるが、細片であり図化には至らなかった。

SK61　調査区中央に位置する。南北0.7m、東西0.6m、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰黄色細砂である。出土遺物は須恵器・土師器であるが、小片であり図化に耐えうるものではなかった。

SK63　調査区北東に位置する南北約3m、東西約4mの不定形の土坑である。深さ0.1mと浅く北東に向かってやや深くなっている。遺構の埋土は暗灰黄色細砂である。出土遺物は須恵器杯蓋（図13-52）・土師器小片である。

柱穴（図5）

SP6　調査区南側に位置する柱穴である。直径約0.3m、深さ0.24mを測る。埋土は灰黄色を呈し、出土遺物は須恵器椀（図13-53）である。小片であるため詳細な時期は特定できないが中世の範疇に収まるものと考える。

SP9　調査区南側に位置する柱穴である。直径約0.2m、深さ0.25mを測る。埋土は灰黄色を呈し、出土遺物は土師器椀（図13-54）・丸瓦（55）である。55は土師質の丸瓦であり、内面に糸切りの痕跡（コビキA）が残る。小片であり厳密な時期の特定は困難であるが、中世の範疇に収まるものと考えられる。

この他、SP10～15では遺物は出土していないものの、埋土の様相がSP6・9と共通することから同時期の遺構であると考える。

溝（図5・9）

SD1　調査区中央を北東から南西に流れる溝である。幅約6.5m、深さ1.0mを測る。出土遺物は土師器椀（図13-56）・須恵器（57～60）・平瓦（61）であり、上層（1・2層）から主に出土している。出土遺物は小片であるがいずれも奈良から平安時代に位置づけられると考えられる。

第3章　総括

1. 江戸時代の遺構

今回の調査では、町屋に関連する土坑や井戸を確認した。

調査地は屋敷地の中央部分にあたり、前述した姫路城第261次の調査において明らかになった街路－建物－水廻り（井戸など）－奥（庭・廃棄土坑・蔵など）という町屋の空間構成にあてはめれば、水廻り空間にあたると考えられる。今回の調査では井戸を10基確認しており、これらの井戸には時期差があるものの、調査地が江戸時代を通して水廻りとして利用されていたことは明らかである。

また、復元した地割から屋敷境が調査地内に位置していると考えられるが、今回の調査においては溝や柵列など明確な屋敷境は確認することができなかった。今回の調査地は、江戸時代の地割が大きく改変されている場所であり、白銀町での発掘調査で確認されたように石組み溝等で敷地が区画されていたとすると、地割りの改変時に失われた可能性も考えられる。

今回、確認した土坑のうちSK6とSK46からは、16世紀後半から17世紀初頭に位置づけられる遺物が出土し、初期城下町の遺構がこの地域にも分布していることを確認することができた。

2.　江戸時代以前の遺構

江戸時代以前の遺構としては、中世の土坑や柱穴及び古代の溝を確認した。

中世の遺構は、少数であり、柱穴の並びなどから掘立柱建物等を復元するには至らなかった。

古代の遺構は、調査区中央で確認した東西に延びる溝1条のみである。調査区東側では砂礫層が上がり、西側に向かって溝が深くなっていることから、本来は東側の地形が高く、西から東に流れをもつものと考えられる。溝からの出土遺物は小片が多く、磨滅しているものも多く見うけられることから、自然河道の可能性も考えられる。

今回の調査により、江戸時代の遺構から町屋の空間構造が明らかになるとともに、城下町形成以前の遺構の広がりを確認することができた。

〈引用・参考文献〉

江戸遺跡研究会　2001　『図説　江戸考古学研究辞典』

九州近世陶磁学会事務局　2000　『九州陶磁器の編年』　九州近世陶磁学会

白神典之　1992　「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号　東洋陶磁学会

小川　望　1994　「「泉州麻生」の刻印をもつ焼塩壺に関する一考察」『日本考古学』1　日本考古学協会

中近世土器研究会　2015　『中近世土器の基礎研究　　東播系須恵器－編年と分布から考える－』

中川　猛　2012　「焙烙－姫路と周辺の焙烙－」『山口大学考古学論集Ⅱ』　中村友博先生退官記念論集作成委員会

乗岡　実　2002　「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』　岡山市教育委員会

藤澤良祐　2007　「総論」『愛知県史　別冊　窯業2　中世・近世　瀬戸系』　愛知県

三浦俊明　1991　「城下町の展開」『姫路市史』第3巻　本編近世2　姫路市史編纂委員会

姫路市教育委員会　2014a　『姫路城城下町跡－姫路城跡第289次発掘調査報告－』

姫路市教育委員会　2014b　『姫路城城下町跡－姫路城跡第300次発掘調査報告－』

姫路市教育委員会　2016a　『姫路城城下町跡－姫路城跡第328次発掘調査報告－』

姫路市教育委員会　2016b　『姫路城城下町跡－姫路城跡第334次発掘調査報告－』

姫路市教育委員会　2017a　『姫路城城下町跡－姫路城跡第338次発掘調査報告－』

姫路市教育委員会　2017b　『姫路城城下町跡－姫路城跡第343次発掘調査報告－』

姫路市　1991　『姫路市史』第3巻　本編近世2　姫路市史編纂委員会

姫路市　1986　『姫路市史』第10巻　史料編近世1　姫路市史編纂委員会

姫路市　1988　『姫路市史』第14巻　別編姫路城　姫路市史編纂委員会

姫路市　1996　『姫路市史』第11 巻上　史料編近世2　姫路市史編纂委員会

姫路市　1999　『姫路市史』第11 巻下　史料編近世3　姫路市史編纂委員会

姫路市　2009　『姫路市史』第4巻下　本編近世2　姫路市史編纂委員会

兵庫県教育委員会　1992　『下相野窯跡』兵庫県文化財調査報告　第107冊

表1　遺物観察表

番号	種別	器種	出土遺構	口径	底径	器高	色調（外）	色調（内）	焼成	胎土	残存状況	調整（外）	調整（内）	備考
1	土師器	焼塩壺蓋	SK1	7.35	—	1.75	10YR7/4	7.5YR6/4	普通	φ1mm以下の砂粒を少量含む	完形	ナデ	布目	
2	瓦	軒丸瓦	SK1	—	—	(4.62)	N4/1	N4/1	普通	φ0.1～1mm程度の砂粒少量含む		ナデ	ナデ	
3	陶器	擂鉢	SK2	(31.0)	(13.4)	10.05	7.5Y4/1～2.5YR4/2	7.5Y4/1	普通	φ0.1～3mm大の白色粒を少量含む		ナデ	ナデ 刷り目	備前焼
4	陶器	擂鉢	SK2	(29.5)	(14.7)	(11.95)	10YR4/3	7.5YR5/3	普通	φ2～4mm大の白色粒・砂粒を含む	底部1/3	ナデ	ナデ 刷り目	
5	瓦	丸瓦	SK2	—	—	(7.98)	N3/	N3/	普通	φ0.1～2mm大の白色粒を少量含む	1/3	ナデ	コビキA	
6	土師器	焙烙	SK3	—	—	(3.3)	2.5YR6/6	7.5YR7/6	普通	φ0.1～2mm大の白色粒を少量含む	1/12	ナデ	ナデ	H類
7	磁器	小皿	SK3	5.4	2.6	1.45	N8/	N8/	普通	φ1mm以下の白色粒多く含む	口縁部1/2	ナデ	ナデ	
8	磁器	蓋	SK3	(4.52)	(10.6)	3.2			普通	密	1/10	ナデ	ナデ	
9	磁器	碗	SK3	(9.95)	4.2	4.95	5GY8/1	5GY8/1	普通	密	底部完形	ナデ	ナデ	
10	磁器	皿	SK3	(13.4)	(9.3)	3.6			普通	φ1mm以下の白色粒をまれに含む	底部1/3	ナデ	ナデ	
11	施釉陶器	碗	SK3	(9.1)	(3.8)	5.18	7.5Y7/1	7.5Y7/1	普通	密	底部1/4	ナデ	ナデ	京・信楽焼
12	施釉陶器	鉢	SK3	(14.9)	(9.0)	6.8	5Y7/1～5Y6/1	7.5Y5/2～7.5Y4/2	普通	φ0.1～3mm大の白色粒をやや多く含む	1/4	ナデ	ナデ	信楽焼か
13	土師器	焙烙	SK6	—	(6.7)	—	10YR5/3～10YR4/2	10YR5/3～10YR4/2	普通	φ0.1～1mm大の赤褐色・白色・灰色・黒色砂粒多く含む	口縁部1/10	ナデ 格子タタキ	ナデ	A1類
14	陶器	擂鉢	SK6	—	—	(6.9)	7.5R3/1～7.5YR5/2	7.5YR5/2	普通	φ0.1mm前後の砂粒混入	口縁部1/8	ナデ	ナデ 刷り目	備前焼
15	磁器	壺	SK7	(7.5)	—	(8.85)	2.5GY8/1	7.5GY8/1	普通	φ0.1mm以下の砂粒を少量含む	ほぼ完形	ナデ	ナデ	
16	陶器	壺	SK7	10.9	—	(9.4)	10YR2/2	7.5YR4/2	普通	φ1～3mmの砂粒を多く含む	口縁部1/1	ナデ	ナデ	
17	土師器	炮烙	SK7	(29.6)	—	(5.7)	7.5YR7/5～7.5YR6/4	5YR7/6～7.5YR4/2	普通	φ0.1～3mm大の砂粒をやや多く含む	口縁部1/7	ナデ	ナデ	H類
18	施釉陶器	徳利	SE7	(4.1)	5.5	(13.0)	N1.5/	5YR6/4	普通	φ1mm以下の砂粒をわずかに含む	底部4/5	ナデ	ナデ	
19	施釉陶器	皿	SK8	—	5.1	(2.95)	5Y6/1	5Y6/1	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	底部1/1	ナデ	ナデ	見込みに目跡(砂目)あり、削り出し高台
20	陶器	鉢(片口)	SK8	15.1	8.05	7.15	N7/	2.5GY7/1	良好	φ1～3mm以下の砂粒を含む	口縁部4/5	ナデ	ナデ	
21	瓦	丸瓦	SK8	—	—	(8.7)	N3/～N8/	N3/～N8/	普通	φ0.1～2mm大の砂粒を少量含む		ナデ	コビキA	
22	石製品	硯	SK24.25	—	—	(1.7)	10Y6/2	10Y6/2	普通		1/8			陸の部分に線刻あり
23	土師器	焙烙	SK30	—	—	(3.72)	7.5YR6/4	5YR6/6	普通	φ0.1～2mm大の砂粒をやや含む	口縁部1/10	ナデ	ナデ	E類
24	白磁	皿	SK30	(13.3)	(6.2)	(2.42)	5GY8/1	5GY8/1	普通	φ1mm以下の砂粒を極少量含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	
25	施釉陶器	碗	SK30	—	4.4	(4.3)	2.5Y6/2	5Y7/2	普通	φ1mm以下の白色粒含む	底部1/1	ナデ	ナデ	
26	施釉陶器	碗	SK30	—	5.42	(3.7)	2.5Y7/3～10YR8/3	2.5Y8/3～5YR6/6	普通	φ0.1～1mm大の砂粒をごく少量含む	底部1/2	ナデ	ナデ	
27	焼締陶器	擂鉢	SK30	—	—	(7.7)			普通	φ1mm以下の砂粒を含む	口縁部1/10	ナデ	ナデ 刷り目	堺・明石系
28	瓦	軒丸瓦	SK30	—	—	(6.95)	N4/	N4/	普通	φ3mm大の砂粒を含む	瓦当部1/4	ナデ	ナデ	揚羽蝶紋
29	施釉陶器	皿	SK46	(10.8)	(5.5)	2.8	10YR8/3	10YR8/3	普通	φ1mm以下の砂粒をまれに含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	青花、削り出し高台
30	磁器	碗	SK46	—	(4.7)	(1.95)	7.5Y8/1	7.5Y8/1	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	底部2/3	ナデ	ナデ	青花、轆轤成形削り出し高台
31	陶器	擂鉢	SK46	—	—	(5.6)	2.5YR5/6	10R5/6	普通	φ0.1～2mm大の砂粒を少量含む		ナデ	ナデ 刷り目	備前焼
32	土師器	焙烙	SK46	—	—	(6.95)	7.5YR5/3	5YR7/6	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナデ 格子タタキ	ナデ ヨコハケ	A1類
33	土師器	焙烙	SK46	—	—	(7.1)	10YR5/3	7.5YR6/6	普通	φ0.1～2mm大の砂粒を少量含む		ナデ 格子タタキ	ナデ	A1類
34	土師質	焙烙	SK46	(24.8)	—	(9.15)	10YR5/2～10YYR3/1	7.5YR6/4	普通	φ0.1～3mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/6	ナデ 格子タタキ	ナデ	A1類
35	土師器	焙烙	SK51	(22.6)	—	(6.0)	7.5YR7/6	7.5YR7/6	普通	φ0.1～2mm以下の砂粒を極少量含む	口縁部1/10	ナデ 格子タタキ	ナデ	A1類
36	陶器	徳利	SE1	3.65	(4.8)	—	2.5YR4/2～5Y8/2	5Y8/2～5Y4/1	普通	φ0.1～5mm程度の砂粒を少量含む	口縁部1/6	ナデ	ナデ	
37	瓦質陶器	火鉢	SE1	—	(7.3)	—	5Y2/1	10YR6/2	普通	φ0.1～0.3mm程度の砂粒を含む	口縁部1/10	ナデ/ミガキ	ミガキ	
38	土師器	焙烙	SE1	24.45	26.0	11.5	7.5R3/1	10R5/8	普通	φ1～3mm大の砂粒を含む	口縁部7/8	ナデ 格子タタキ	ナデ	
39	瓦	丸瓦	SE1	—	—	—	N4/～5Y8/2	7.5Y4/1～5Y7/2	普通	φ0.1～1mm程度の砂粒少量含む	1/6	ナデ	コビキA	
40	土師器	皿	SE2	(10.5)	(8.2)	(2.0)	10YR7/3	2.5Y7/3	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	口縁部1/5	ナデ	ナデ	底部糸切り
41	土師器	焼塩壺	SE2	5.85	5.0	9.5	5YR7/6～7.5YR7/6	2.5YR6/6	普通	φ4mm以下の砂粒を含む	ほぼ完形	ナデ	ナデ	
42	土師器	焼塩壺	SE2	6.05	5.3	9.2	7.5YR8/4	5YR8/4	普通	φ3mm以下の砂粒を含む	3/1	ナデ	ナデ	
43	土師器	焙烙	SE5	—	—	(4.75)	7.5YR7/4	5YR7/6	普通	φ1mm以下の砂粒を多く含む	口縁部1/20	ナデ	ナデ	E類
44	施釉陶器	碗	SE7	—	5.8	(3.8)	2.5Y8/3	2.5Y8/3	普通	φ0.1mm以下の砂粒を微量含む	底部1/1	ナデ	ナデ	削り出し高台
45	施釉陶器	碗	SE7	—	4.45	(3.82)	10Y8/1～7.5Y6/2	7.5Y6/2	普通	φ0.1～1mm以下の砂粒を少量含む	底部完形	ナデ 底部糸切り	ナデ	削り出し高台
46	磁器	鉢	SE7	(22.8)	—	(9.3)	7.5GY8/1	N8/	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	
47	陶器	擂鉢	SE7	(29.55)	(5.9)	—	5Y8/3～10R4/2	10R5/4～7.5YR3/2	普通	φ0.1～4mm大の砂粒を少量含む	口縁部1/10	ナデ	ナデ 刷り目	備前焼
48	陶器	擂鉢	SE7	(26.4)	(13.4)	(10.05)	10R4/3	2.5YR5/3～10R4/3	普通	φ1～3mm以下の砂粒を含む	口縁部1/5	ナデ	ナデ 刷り目	備前焼
49	施釉陶器	皿	SE9	—	—	(1.55)	5Y7/6	5Y7/4	普通	φ1mm以下の砂粒をまれに含む	口縁部1/10	ナデ	ナデ	瀬戸・美濃焼
50	瓦質土器	鉢	SE9	—	—	(1.8)	N4/	N7/	普通	φ1mm以下の砂粒多く含む	口縁部1/20	ナデ	ナデ	
51	須恵器	碗	SK43	—	—	(1.8)	N6/	N6/	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	口縁部1/12	ナデ	ナデ	
52	須恵器	杯蓋	SK63	—	—	(2.2)	N8/	N8/	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	口縁部1/12	ナデ	ナデ	
53	須恵器	碗	SP6	—	—	(1.89)	N7/	N7/	普通	φ0.1～1mm大の砂粒を少量含む	口縁部1/12	ナデ	ナデ	
54	土師器	碗	SP9	—	(5.45)	(2.19)	7.5YR7/6	7.5YR7/6	普通	φ0.1～1mm大の砂粒を少量含む	底部1/4	ナデ	ナデ	
55	瓦	丸瓦	SP9	—	—	—	2.5Y8/1～2.5Y6/1	2.5Y7/4～2.5Y6/1	普通	φ0.1～2mm大の砂粒やや多く含む		ナデか	コビキA	
56	土師器	杯	SD1	(12.6)	—	2.5			普通	φ1mm以下の砂粒を含む	口径1/5	ナデ	ナデ	
57	須恵器	杯身	SD1	(9.8)	—	(4.0)	N8/	N8/	良好	φ1mm以下の砂粒を含む	口縁部1/7	ナデ	ナデ	
58	須恵器	杯	SD1	—	—	(2.55)	N7/	N7/	良好	φ1mm大の砂粒をまれに含む	口縁部1/14	ナデ	ナデ	貼付け高台
59	須恵器	杯蓋	SD1	—	—	(2.55)	N7/	N7/	普通	φ0.1～1mm大の砂粒を少量含む	底部1/10	ナデ	ナデ	
60	須恵器	鉢	SD1	—	(14.4)	(9.4)	N8/	5Y8/1	普通	φ1mm大の砂粒をやや多く含む	底部1/8	ナデ	ナデ	貼付け高台
61	須恵器	平瓦	SD1	—	—	—	N5/	N5/～10Y4/1	普通	φ0.1～2mm大の砂粒を少量含む		ナデ	格子タタキ	

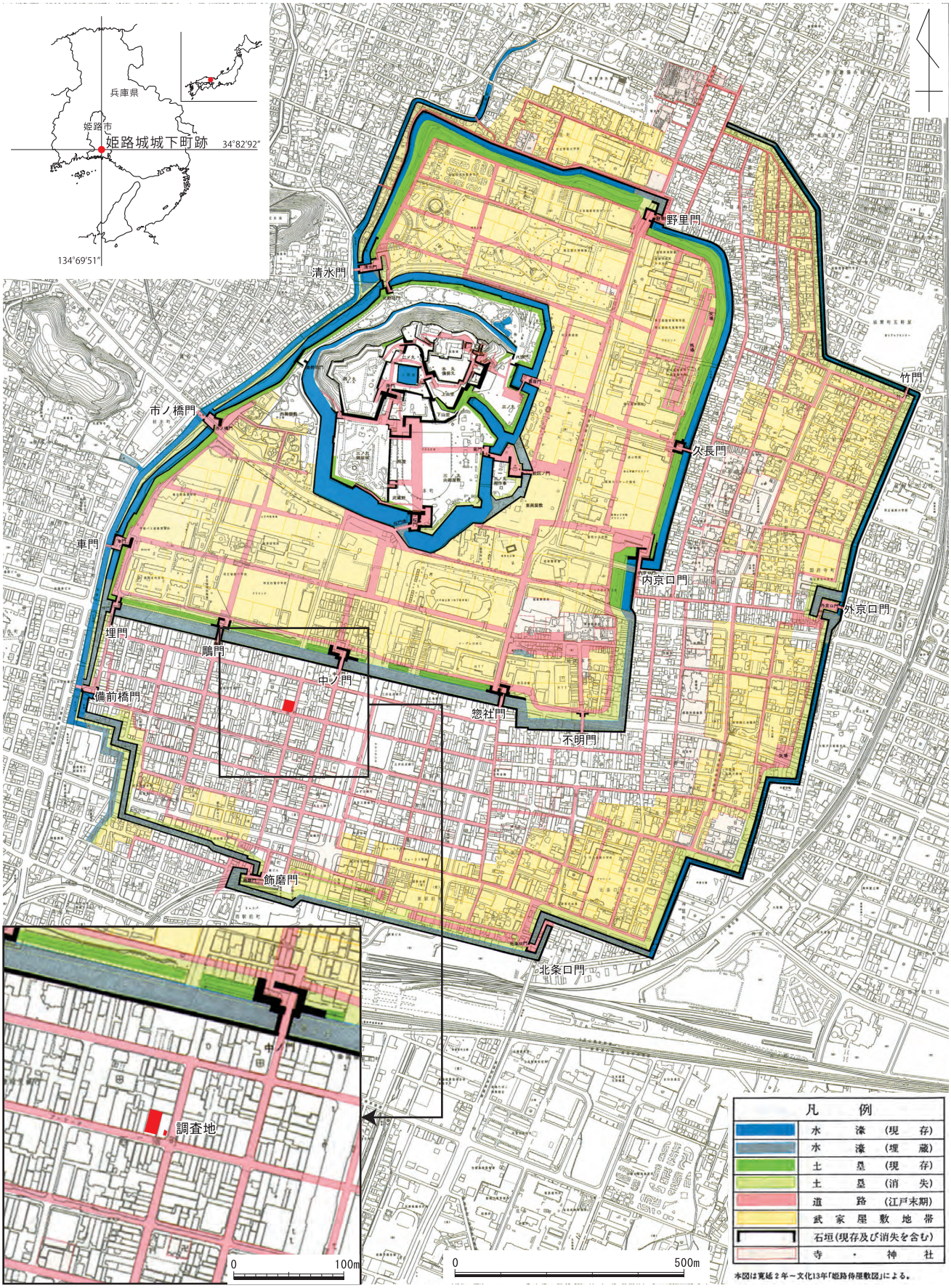
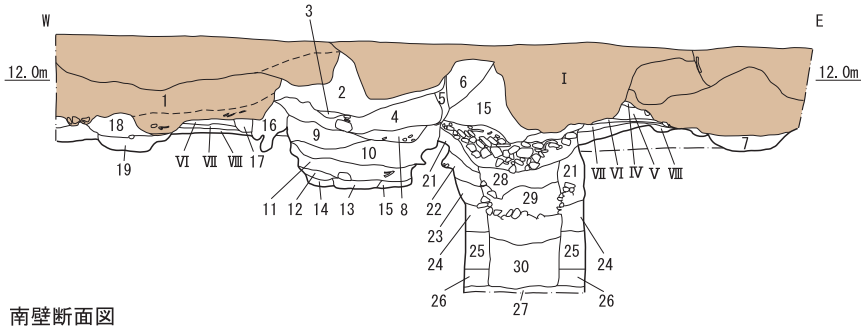


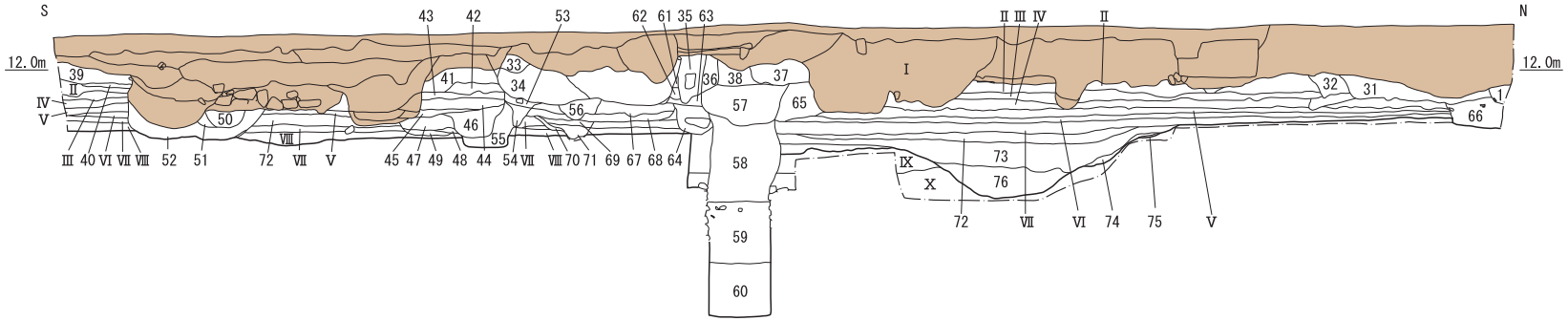
図2　調査位置図（S＝1：12,000・S=1：5,000）

図3　調査区断面図（S=1：100）

北壁断面図



南壁断面図



＜基本層序＞

Ⅰ　盛土
Ⅱ　2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
Ⅲ　2.5Y4/2 暗灰黄色細砂（土器片含む）
Ⅳ　5Y5/2 灰オリーブ色細砂混じりシルト（炭化物含む）
Ⅴ　2.5Y6/6 明黄褐色極細砂混じりシルト（第１面）
Ⅵ　2.5Y5/4 黄褐色極細砂から細砂
Ⅶ　2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂混じりシルト
Ⅷ　2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂混じりシルト
Ⅸ　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（第２面）
Ⅹ　10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルト

盛土

＜遺構埋土＞

1, 10YR4/2 灰黄褐色細砂から中砂、瓦・貝・陶磁器多量に含む
2, 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂から中砂、炭化物・貝・瓦・円礫多く含む
3, 10YR4/4 褐色中砂
4, 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂からシルト、陶磁器・瓦片含む
5, 2.5Y5/3 黄褐色シルト
6, 10YR4/4 褐色細砂
7, 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂から中砂
8, 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
9, 2.5Y5/4 中砂黄褐色、円礫・瓦多く含む
10, 2.5Y3/2 黒褐色中砂、炭化物含む
11, 5Y4/2 灰オリーブ色極細砂混じりシルト、地山ブロック含む
12, 2.5Y5/6 黄褐色シルト
13, 2.5Y4/1 黄灰色シルト
14, 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂
15, 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、地山ブロック含む
16, 2.5Y5/3 黄褐色細砂、炭化物含む
17, 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
18, 2.5Y4/3 オリーブ褐色中砂、円礫・炭化物・土器細片含む
19, 2.5Y4/1 黄灰色細砂、地山ブロック含む
20, 10YR4/4 褐色細砂
21, 10YR3/2 黒褐色シルトに明黄褐色シルト含む
22, 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂混じりシルト
23, 2.5Y3/3 暗オリーブ色シルトに 2.5Y5/3 黄褐色極細砂混じりシルト含む
24, 2.5Y4/1 黄灰色シルト
25, 2.5Y7/3 浅黄色極細砂混じりシルト
26, 2.5Y6/1 黄灰色細砂、円礫含む
27, 10YR4/2 灰黄褐色細砂から小礫
28, 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
29, 2.5Y5/1 黄灰色シルト、こぶし大の円礫含む
30, 2.5Y5/3 黄褐色シルト、人頭大の円礫多く含む
31, 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂（下層に粗砂層状に堆積）
32, 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂に 2.5Y6/6 明黄褐色シルトブロック上に含む
33, 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
34, 2.5Y6/6 明黄褐色細砂混じりシルト
35, 2.5Y6/2 灰黄色細砂
36, 2.5Y6/8 明黄褐色細砂
37, 10YR5/6 黄褐色細砂から中砂
38, 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂
39, 2.5Y6/2 灰黄色細砂
40, 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
41, 2.5Y4/1 黄灰色細砂
42, 2.5Y6/6 明黄褐色シルトに 2.5Y6/1 黄灰色極細砂含む
43, 2.5Y4/1 黄灰色細砂
44, 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混じりシルト
45, 2.5Y6/2 灰黄色細砂混じりシルト
46, オリーブ褐色中砂から粗砂、小礫含む
47, 10YR4/3 灰黄褐色 10YR4/2 粗砂
48, 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
49, 2.5Y5/2 灰黄褐色シルト
50, 10YR4/4 褐色中砂から粗砂
51, 2.35Y5/2 暗灰黄色シルト
52, 2.5Y6/1 黄灰色細砂混じりシルト
53, 2.5Y5/3 黄褐色細砂
54, 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂
55, 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂小礫多く含む
56, 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂
57, 2.5Y3/2 黒褐色細砂混じりシルト
58, 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
59, 2.5Y4/1 暗褐色シルト
60, 10YR3/3 暗褐色砂礫、円礫多く含む
61, 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
62, 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂
63, 2.5Y5/3 黄褐色シルト
64, 2.5Y5/2 ～ 5/3 黄褐色極細砂
65, 2.5Y5/3 黄褐色細砂
66, 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトににぶい黄色 2.5Y6/3 細砂、ブロック状に含む
67, 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、細砂含む
68, 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトに 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂、ブロック状に含む
69, 2.5Y7/1 灰白色シルト
70, 5Y5/2 灰オリーブ色粗砂
71, 5Y6/2 灰オリーブ色中砂から細砂
72, 5Y6/2 灰オリーブ色細砂混じりシルト
73, 10YR5/2 灰黄褐色細砂
74, 10YR4/1 褐灰色シルト、鉄分沈着
75, 2.5Y4/1 黄灰色細砂混じりシルト
76, 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂

0　5m

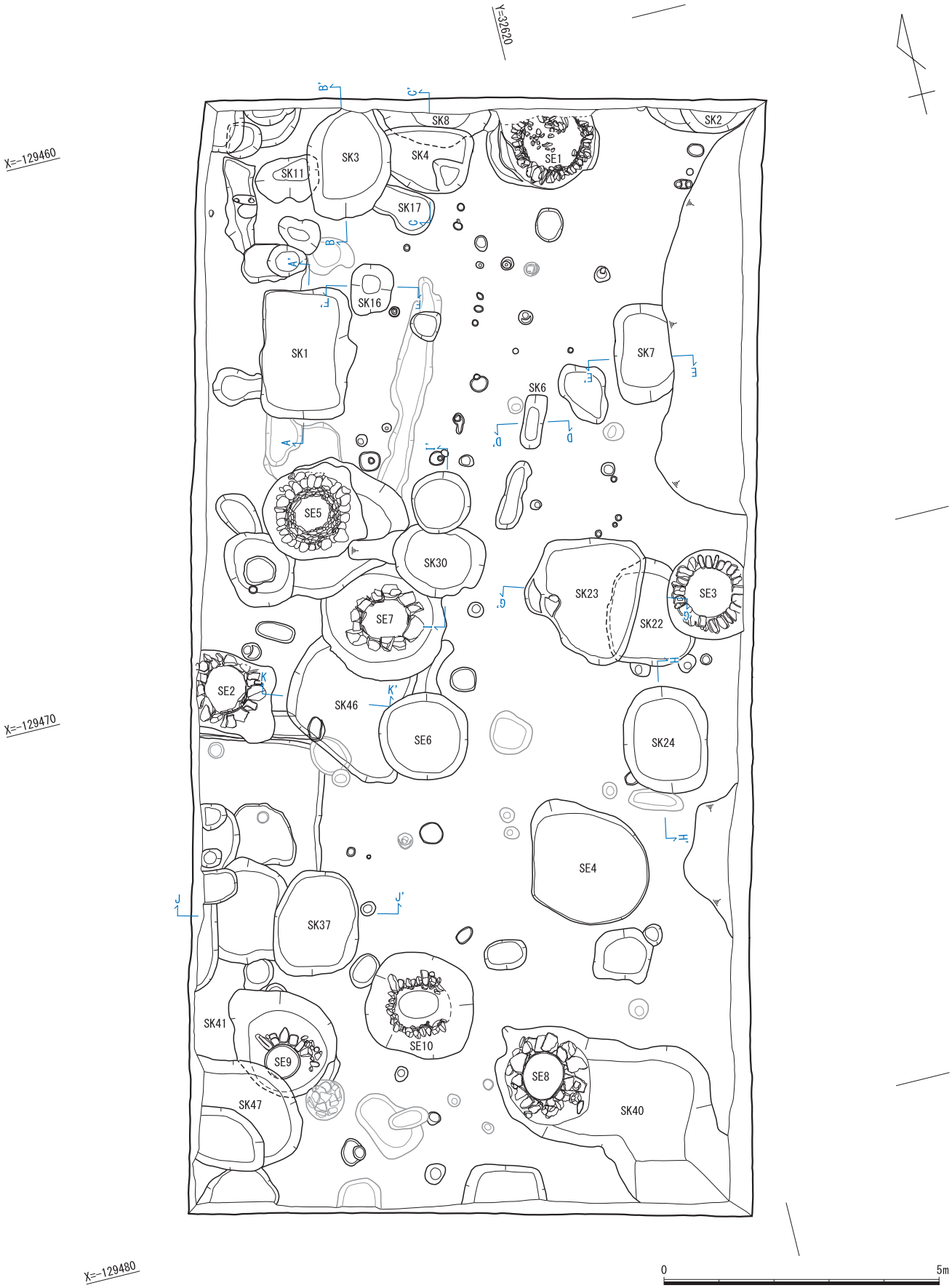


図4　第1面遺構平面図（S=1：100）

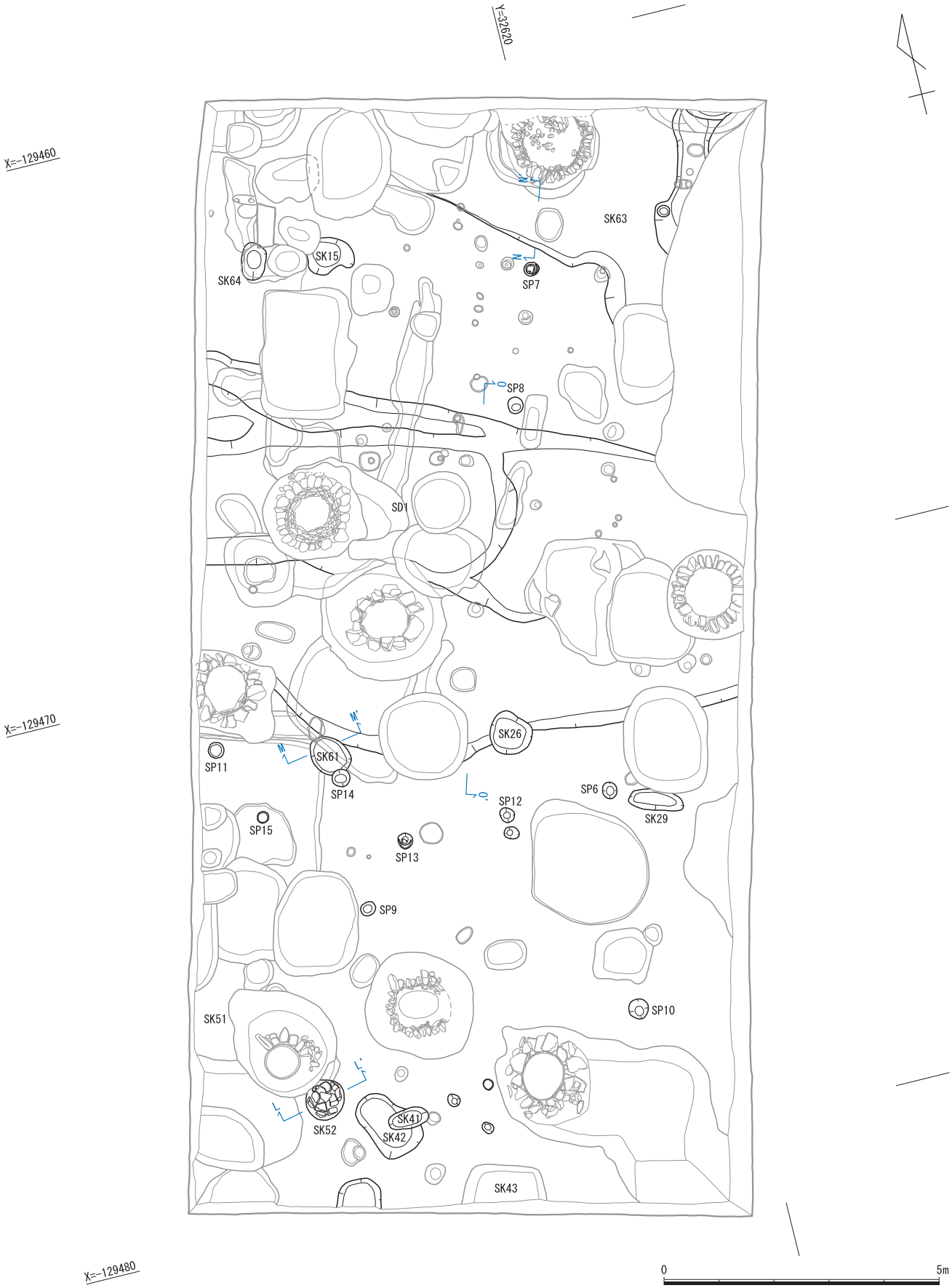
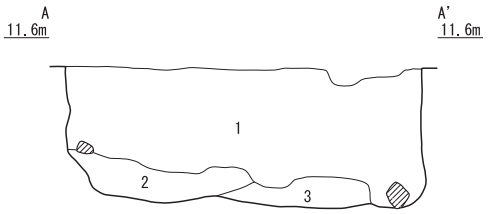


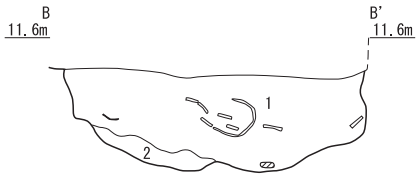
図5　第2面遺構平面図（S=1：100）

SK1



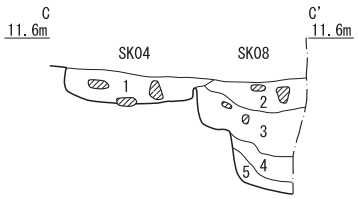
1, 10YR3/2 黒褐色粗砂、円礫・瓦・陶磁器片多く含む
2, 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混じりシルト
3, 10YR4/2 灰黄褐色シルト

SK3



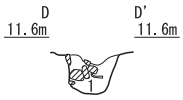
1, 10YR3/2 黒褐色粗砂、瓦・陶磁器・円礫多く含む
2, 2.5Y4/2 灰黄褐色シルトに 2.5Y5/3 黄褐色シルトブロック状に含む

SK4・8



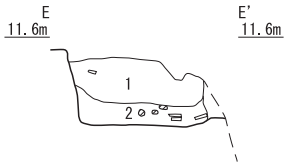
1, 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂、円礫含む
2, 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂、炭化物含む
3, 10YR3/2 黒褐色細砂混じりシルト
4, 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
5, 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト

SK6



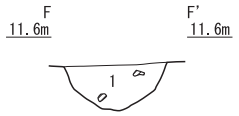
1, 10YR4/1 褐灰色細砂混じりシルト円礫多く含む

SK7



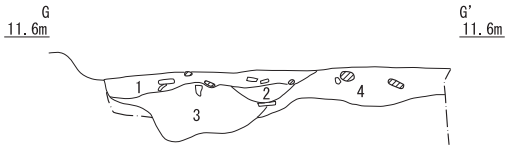
1, 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
2, 2.5Y4/1 黄灰色粗砂

SK16



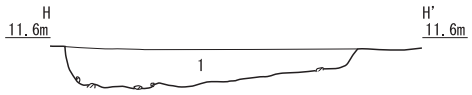
1, 2.5Y4/2 暗黄灰色細砂混じりシルトに 2.5Y5/4 黄褐色極細砂混じりシルトブロックに含む

SK22・23



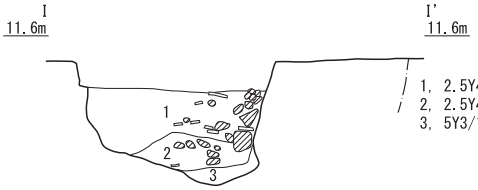
1, 10YR4/2 灰黄褐色細砂
2, 10YR4/1 褐灰色シルト
3, 2.5Y4/1 黄灰色シルトに 2.5Y5/6 黄褐色細砂含む
4, 2.5Y4/1 暗灰黄色細砂

SK24



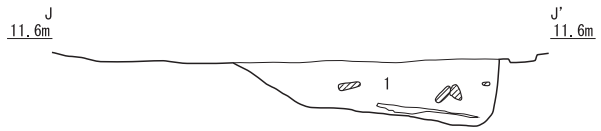
1, 5Y3/1 オリーブ黒色細砂、円礫・瓦片・炭化物多く含む

SK30



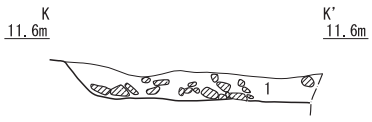
1, 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂
2, 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト
3, 5Y3/1 オリーブ黒色細砂

SK37



1, 2.5Y4/3 オリーブ褐色中砂、小礫・炭化物含む

SK46



1, 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混じりシルト

図6　第1面 遺構断面図（1：50）

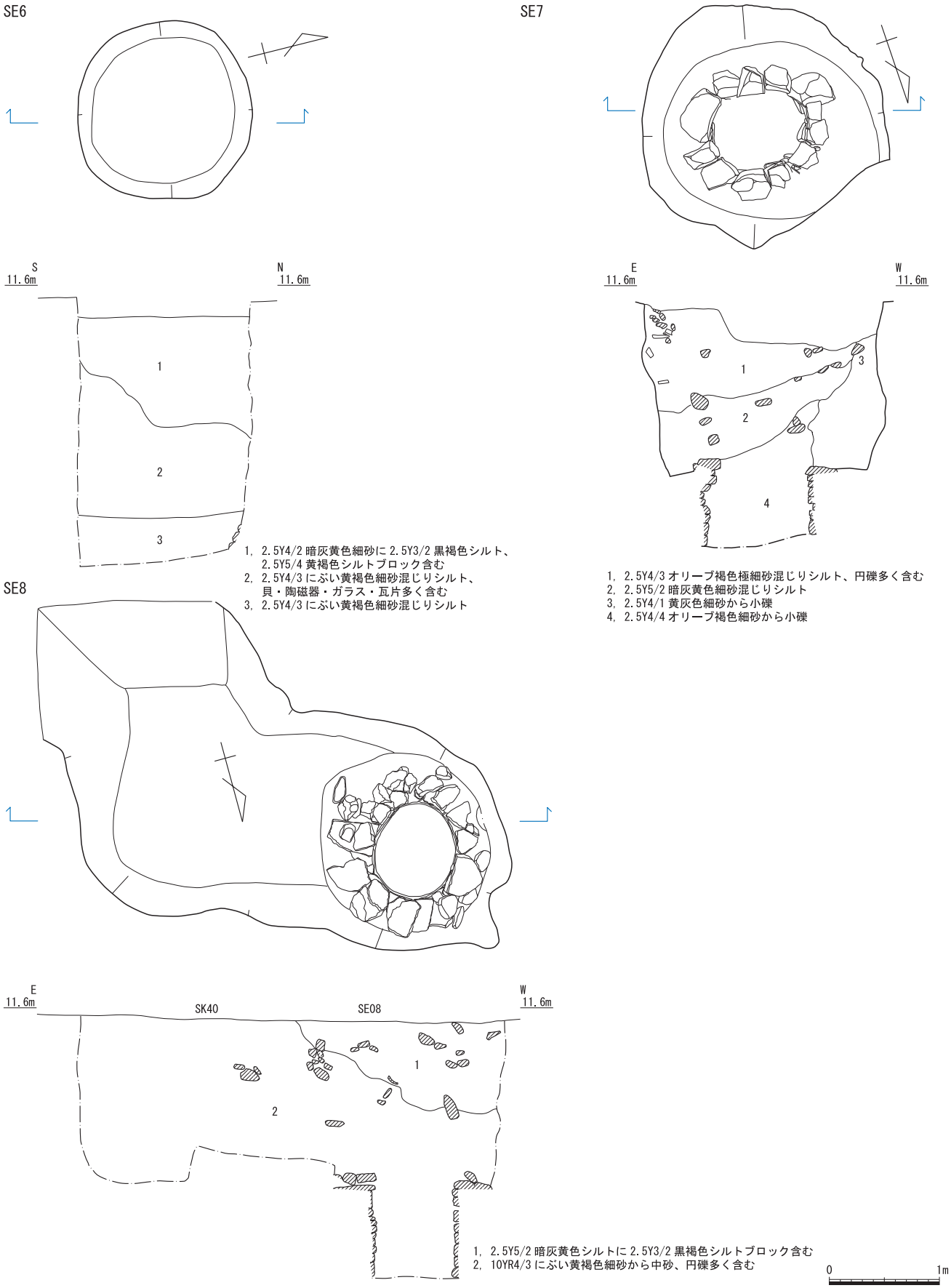
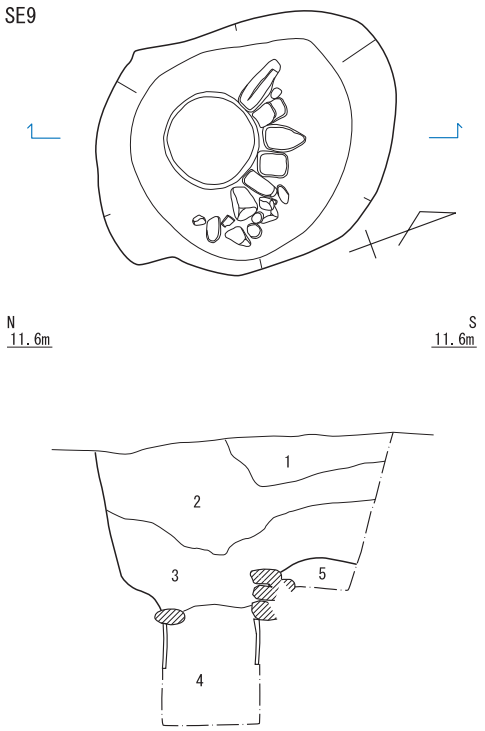


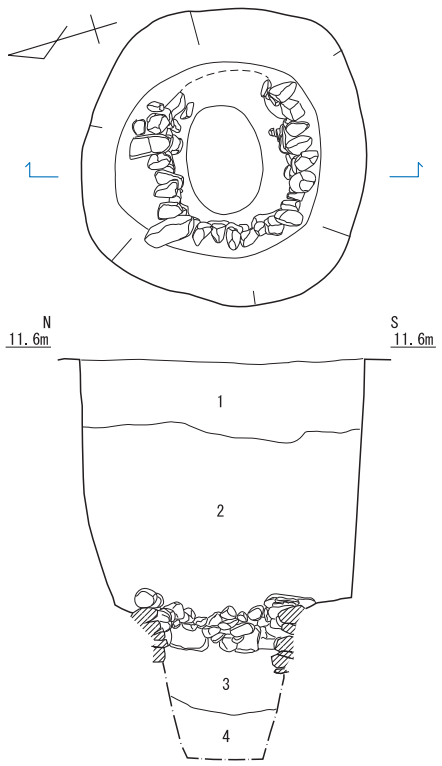
図7　井戸 平・断面図①（S＝1：50）

SE9



1, 2.5Y5/3 黄褐色シルトに 2.5Y5/4 黄褐色極細砂ブロック含む、炭・土器片あり
2, 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂に 2.5Y3/1 黒褐色細砂層状に含む
3, 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトに 2.5Y5/3 黄褐色細砂、小礫含む
4, 2.5Y4/1 黄灰色シルトに 2.5Y3/1 黒褐色シルトブロック含む
5, 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト

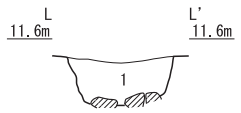
SE10



1, 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂に 2.5Y4/1 黄灰色シルトブロックに含む
2, 2.5Y3/2 黒褐色極細砂混じりシルトに 2.5Y6/2 灰黄色シルトブッロクに含む
3, 2.5Y3/1 黒褐色細砂混じりシルトに 2.5Y6/2 灰黄色シルトブッロクに含む
4, 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト

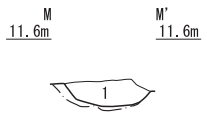
図8　井戸 平・断面図②（S=1：50）

SK52



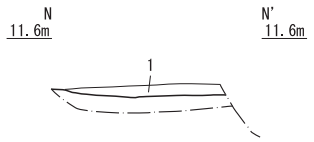
1, 2.5Y6/2 灰黄色極細砂～細砂

SK61



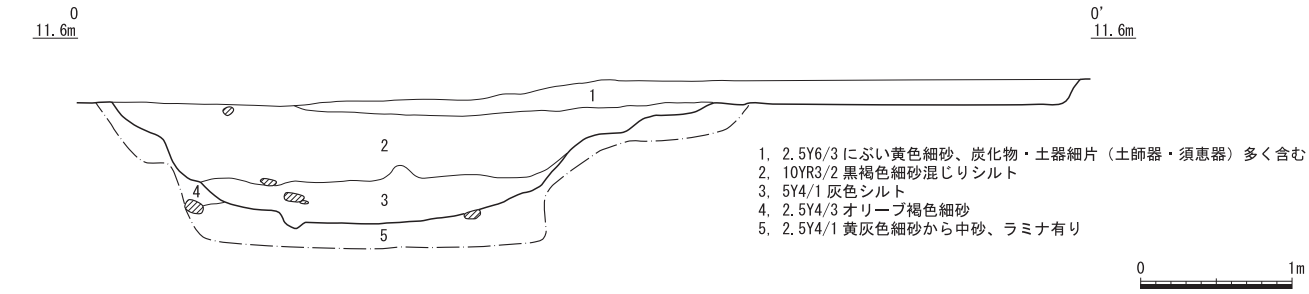
1, 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂

SK63



1, 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトに 2.5Y5/6 黄褐色細砂ブロック含む

SD1



1, 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂、炭化物・土器細片（土師器・須恵器）多く含む
2, 10YR3/2 黒褐色細砂混じりシルト
3, 5Y4/1 灰色シルト
4, 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
5, 2.5Y4/1 黄灰色細砂から中砂、ラミナ有り

図9　第2面 遺構断面図（1：50）

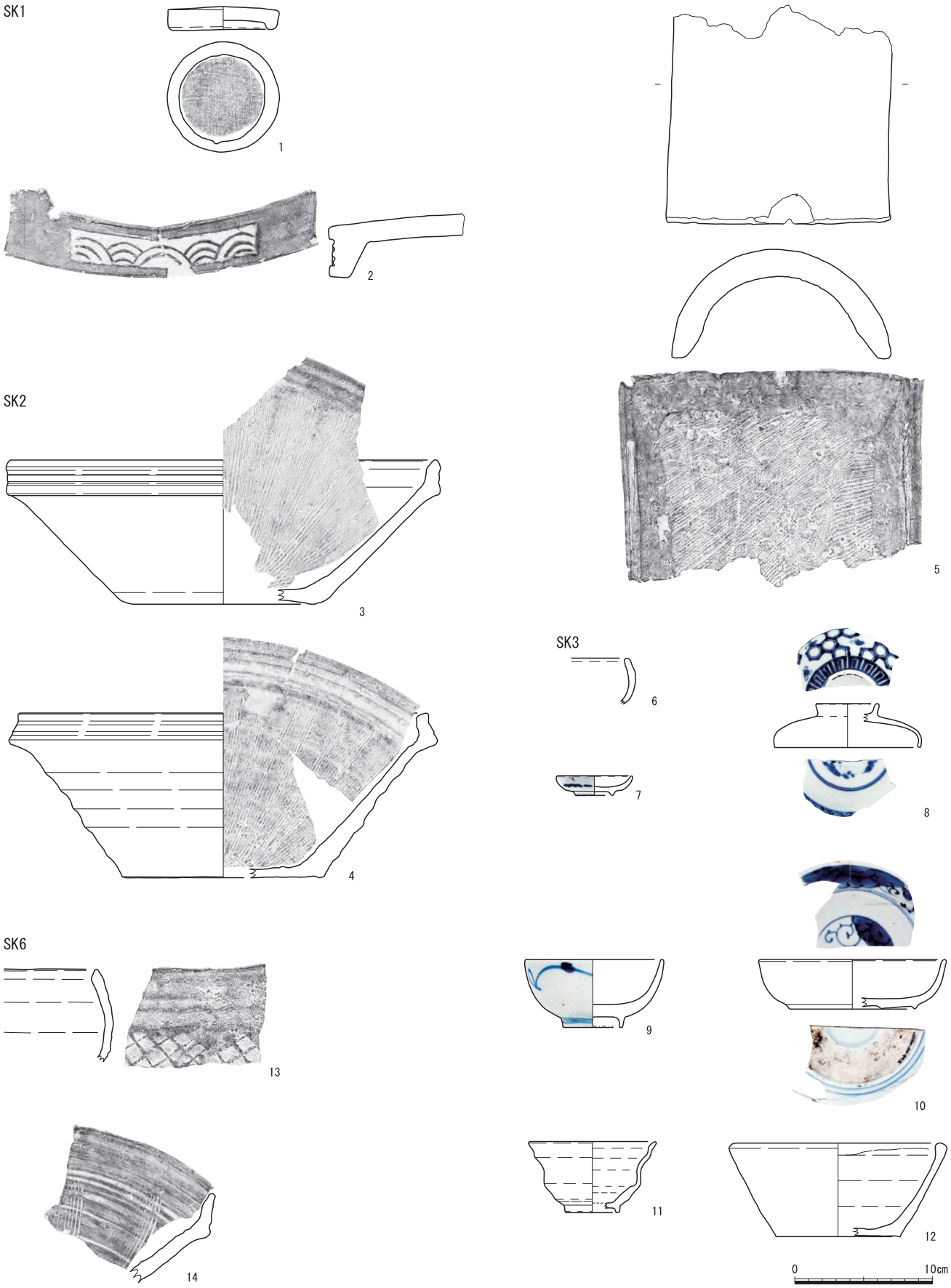


図10　遺物実測図①（S=1：4）

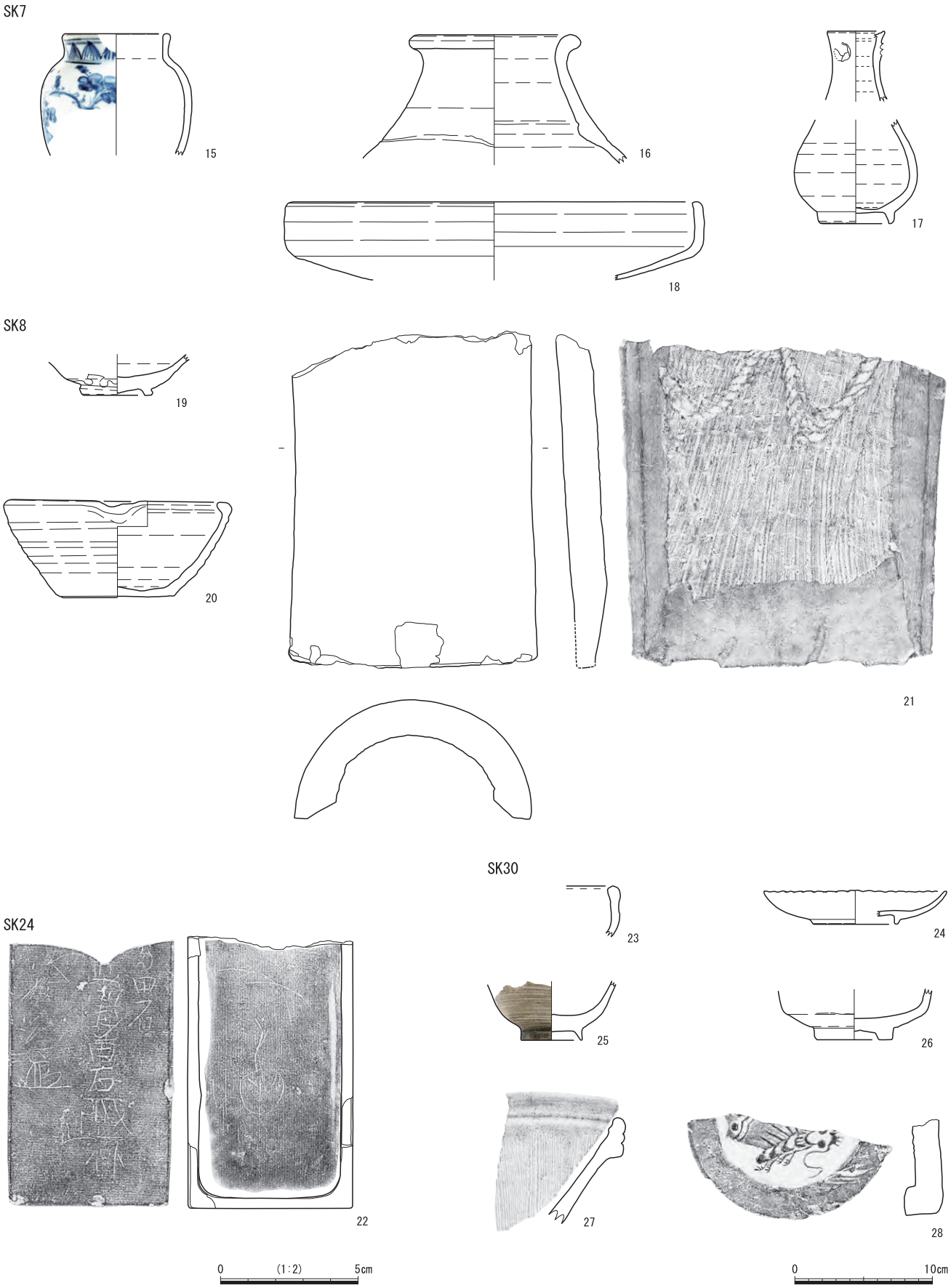


図11　遺物実測図②（S=1：4・22はS=1：2）

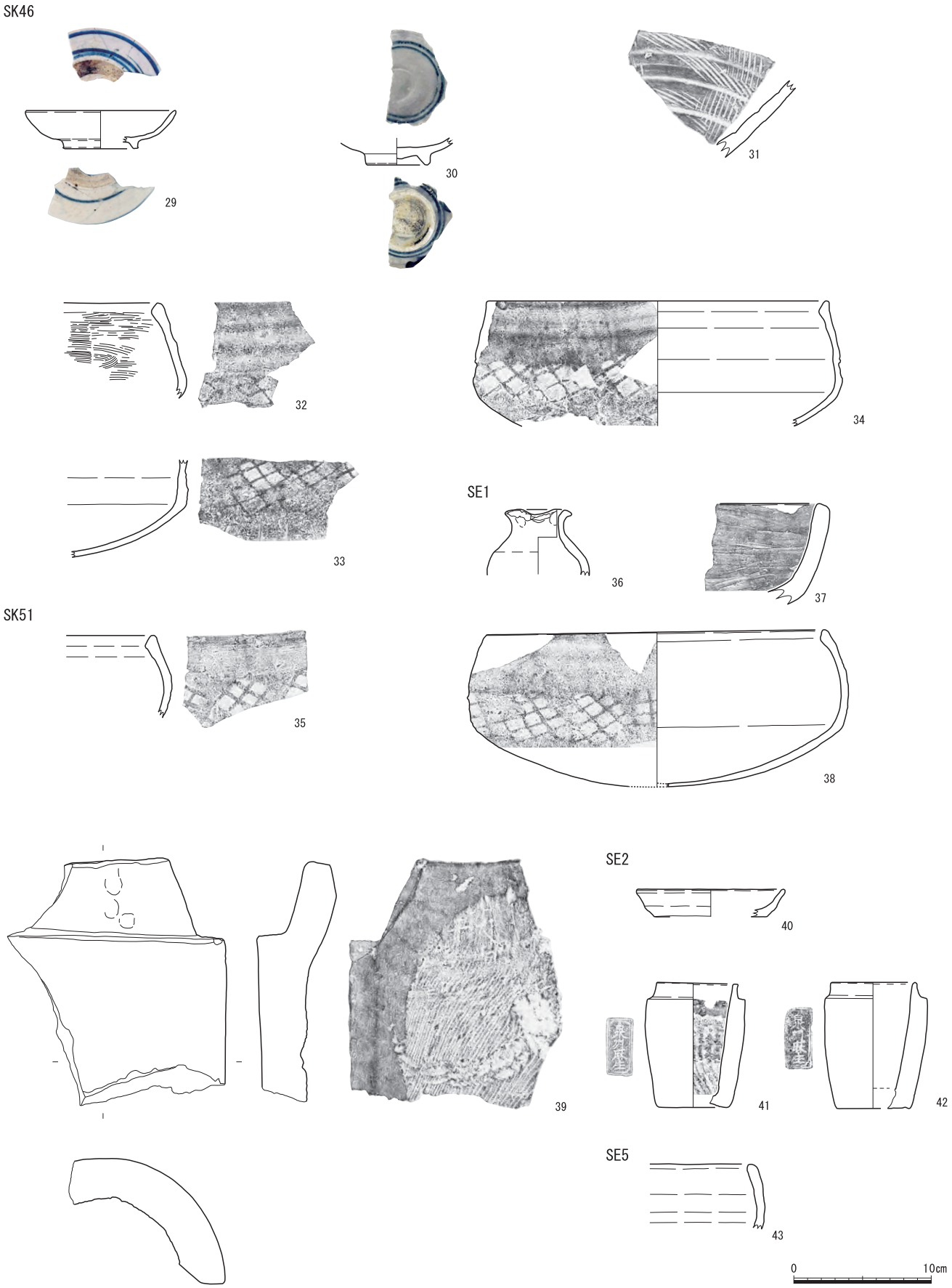


図12　遺物実測図③（S=1：4）

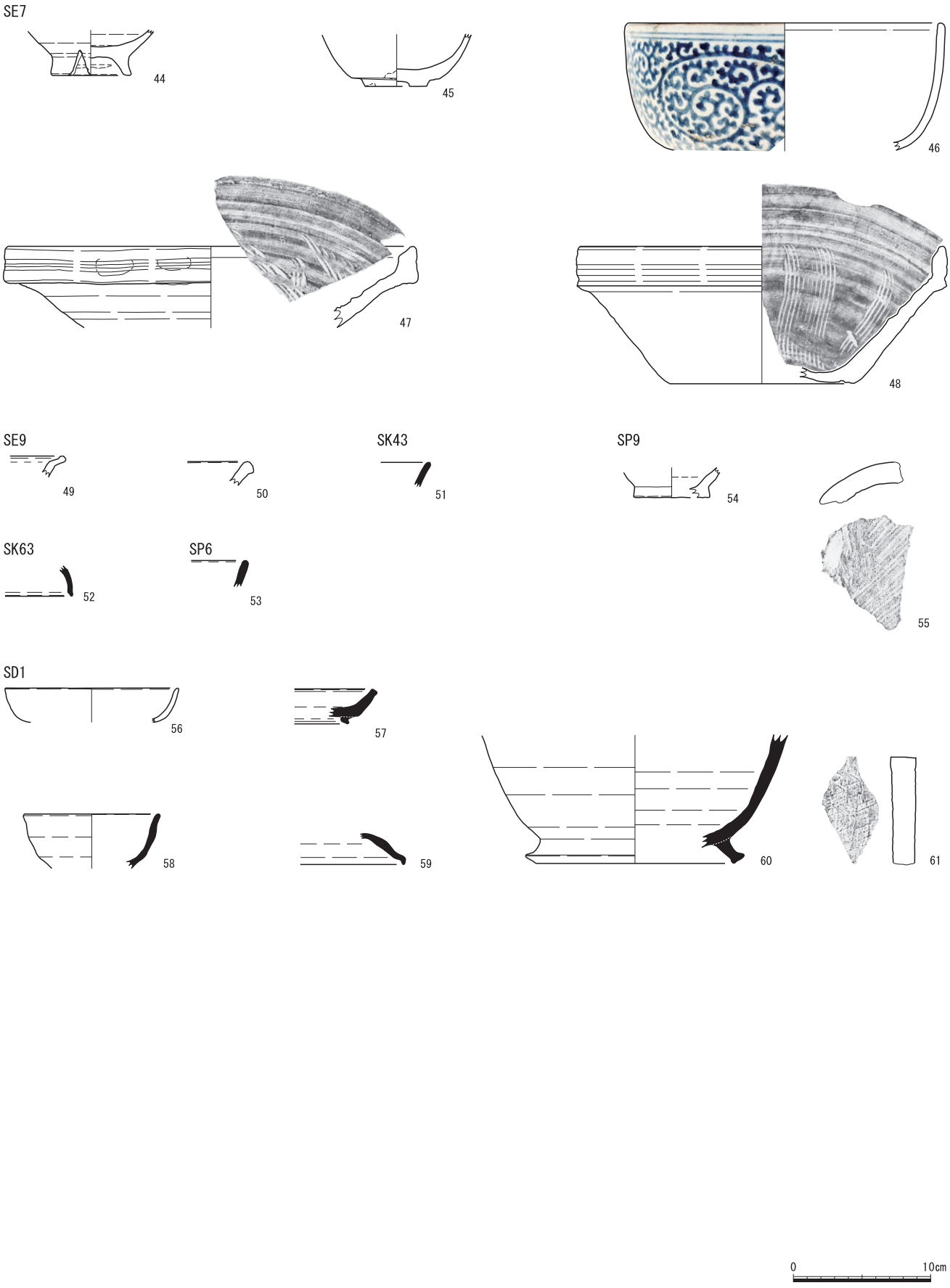


図13　遺物実測図④（S＝1：4）

写真１　調査区全景（西より）

写真 2　第 1 面全景（南より）

写真 3　第 2 面全景（南より）

写真 4　SK1 土層断面（A-A'）

写真 8　SK7 土層断面（E-E'）

写真 5　SK3 土層断面（B-B'）

写真 9　SK22・23 土層断面（G-G'）

写真 6　SK4・8 土層断面（C-C'）

写真 10　SK30 土層断面（I-I'）

写真 7　SK6 土層断面（D-D'）

写真 11　SK37 土層断面（J-J'）

写真 12　SK46 土層断面（K-K'）

写真 13　SE8 平面状況

写真 14　SE9 平面状況

写真 15　SK52 土層断面（L-L'）

写真 16　SK52 平面状況

写真 17　SK61 土層断面（M-M'）

写真 18　SK63 土層断面（N-N'）

写真 19　SD1 土層断面（O-O'）

写真 20　SK1 出土遺物

写真 21　SK22・23 出土遺物

写真 22　SK24 出土遺物

写真 23　SK8 出土　鉢

写真 26　SK22・23 出土　火打ち石

写真 24　SE1 出土　焙烙

写真 27　SK24 出土　硯

写真 25　SE2 出土　焼塩壺

写真 28　SK52 出土　石

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと
書名	姫路城城下町跡
副書名	姫路城跡第360次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第57集
編著者名	関　梓
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
発行年月日	平成30年（2018年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	兵庫県姫路市（ひょうごけんひめじし）西二階町（にしにかいまち）93番他	28201	020169	34°49′56″	134°41′23″	2016.8.9～2016.9.28	201㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
姫路城城下町跡	集落跡	奈良時代 室町時代 江戸時代	溝 土坑・柱穴 土坑・井戸・柱穴	須恵器・土師器 須恵器・土師器 陶磁器・焙烙・擂鉢 焼塩壺・瓦	

要約	江戸時代の町屋跡の発掘調査を行い、井戸や土坑などを確認した。特に今回の調査では井戸を10基検出し、調査地が町屋における水廻り空間に位置することが確認された。また、中世の土坑・柱穴、奈良時代の溝を確認し、当地における江戸時代以前の様相を考える上で貴重な成果を得ることができた。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第57集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第360次発掘調査報告書―

平成30年（2018年）3月31日　発行

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252-3950

発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　株式会社デイリー印刷
〒671-0218　兵庫県姫路市飾東町庄57番地2